



山田和樹

あまがけ

世界を天翔る日々

佐野光司

山田和樹が読響の首席客演指揮者として1月に4回指揮する。18日には諸井三郎の〈交響的断章〉や藤倉大の委嘱新作ピアノ協奏曲第3番〈インパルス〉とプログラムも意欲的だ。

私が最初に山田和樹に注目したのは、2011年『音楽の友』誌が毎年催すその年度の「コンサート・ベストテン」においてだった。多くの候補の中から絞りに絞って10点を選ぶのだが、その中に彼の指揮による2公演が入っていたので次のように書いた。「山田和樹が2回上がっているが、彼の指揮は近年の若手の中では抜きでている。響きが豊満であり艶やかな輝きがある。音楽の流れに緩急の起伏があり、それが音楽的時間を生きたものとしている。そしてなにより、音楽には不可

欠な上品なエロティシズムがある」

これ以前には、彼がブザンソン国際指揮者コンクールで優勝した程度にしか知らなかった。だがこの結果、「齋藤秀雄メモリアル基金音楽賞」に推薦し、2012年に受賞した。

世界を巡る活動

彼の主な経歴をざっと振り返ってみると、短期間に国際的な指揮者に駆け上っていることが分かる。

09年 ブザンソン国際指揮者コンクール1位

12年 スイス・ロマンダ管弦楽団首席客演指揮者／日本フィルハ

ーモニー交響楽団正指揮者／文化庁芸術祭新人賞受賞

14年 東京混声合唱団音楽監督（16年より理事長も兼務）／モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者／スイス・ロマンダとの契約を17年まで延長

16年 モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督 兼 芸術監督

17年 芸術選奨文部科学大臣新人賞

18年 読売日本交響楽団の首席客演指揮者に就任

スイス・ロマンダは名匠アンセルメが育てた世界有数のオーケストラである。モンテカルロ・フィルも1856年創立の長い伝統を持ち、モンテカルロ歌劇場のオーケストラも務めるモナコ公国で唯一のオーケストラだ。この10年にも満たない間にバリ管、ドレスデン・フィル、チェコ・フィル、モスクワ市響など多くのヨーロッパのオーケストラを指揮しており、14年にはスイス・ロマンダの日本公演、16年にはバーミンガム市響の日本公演を成功させた。またたく間に、日本とヨーロッパを駆け巡ってしまったのだ。

謙虚な勉強家

山田和樹は根っからの指揮者と言え

る。高校時代には吹奏楽の指揮をし、東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。この学生時代にオーケストラを組織して1998年に「TOMATOフィルハーモニー管弦楽団」を創設した。これは2005年に「横浜シンフォニエッタ」と改称して現在でも活躍している。

彼はまた、作品演奏のイメージーションを広げることに貪欲で、しかも勉強家だ。ニールセンを指揮する際、作曲者の故郷デンマークへ行ったり、隠れキリシタンの「オラショ」を含む曲の演奏のために長崎まで出向いたりしている。2012年にサイトウ・キネン・フェスティバル松本で小澤征爾の推薦により〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を指揮したが、それをパリでも振ることになった時、今度はジャンヌ・ダルクの生家を訪ねてドンレミ村まで行き、さらにフランス解放の戦線に向かった地を歴訪している。イメージーションを膨らませていったのだ。

私と山田和樹との出会いは2012年、サントリー・サマーフェスティバルで彼がクセナキスの音楽劇〈オレスティア〉を指揮した後のレセプションであった。紹介された時、彼が「あなたが佐野先生でしたか」と言ったので驚いた。訳を聞いたら、彼が初めて〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を指揮する際、これを分析した修士論文を読んで

よく理解できたという。その論文の指導教官が私だったのだ。彼が謙虚な勉強家だと知ったのは、その時だ。

企画と演奏の妙

彼はまた、新たな企画を次々に考え実行して自らを肥やしている。日本フィルとともに2015年から3年間続けたマーラーの交響曲全曲演奏がその一つだが、この時は何とすべて武満徹の作品との組み合わせだった。前半に武満のたゆたうような耽美的な音楽を置いて、後半にマーラーのゲルマン的な轟然とした音楽を対置するのは考えも及ばない対照の妙であった。それは現代日本の色彩と静謐の世界と、後期ロマン派の最後の絢爛豪華な、しかし減りゆく輝きとの対比であった。

16年には、柴田南雄生誕100年没後20年の折に交響曲〈ゆく河の流れは絶えずして〉(1975)を「後世に伝えるべき作品」として、再演を果たした。これは同年度の文化庁芸術祭大賞を取ったが、山田の中にはマーラーに武満を組み合わせたいという意識が強くある。石井眞木の傑作、雅楽とオーケストラの〈遭遇Ⅱ〉を46年ぶりに再演したのもその一環だ。今は世界の国歌を録音中である。



文化庁芸術祭大賞受賞の打ち上げにて (筆者提供)

また、山田和樹は協奏曲の指揮が上手い。オーケストラとソロのバランスの取り方が巧みだ。指揮者の位置からはすべての響きが聴こえているが、聴衆にとっては協奏曲の場合、特にヴァイオリンは聴こえ難いことが多い。だが、彼はそのへんを見事に調整する。また、アンサンブルの揃え方が、縦にテンポを取って揃えるというよりは、水平的にフレーズごとに揃えるかのように響く。そのため音楽の起伏がふくよかで、官能性がにじみ出るかのような指揮をする。これは天性のものだ。

山田和樹がこれからどれだけの高みに上りつめていくか。これまではブザンソン優勝以来、天翔るように世界中を飛び回ってきた。今最も上昇気流に乗っている指揮者である。

(さの こうじ・桐朋学園大学名誉教授)

首席客演指揮者
Principal Guest Conductor

Kazuki Yamada 山田和樹からの メッセージ



©読響

学生時代、何度もリハーサルを見学させていただいた読響。2011年に初めてその指揮台に立つ機会をいただいて以来、共演を重ねてきましたが、読響は自分にとって、常に進化しつづけるオーケストラです。

音楽的な充実はもちろんのことですが、それだけでなく、近年のオリジナリティ溢れる年間パンフレットなどは、まさに日本の最先端のオーケストラであることを示しているように思います。読響には常に鮮烈さがあるのです。

その読響の首席客演指揮者に就任させていただく喜びを、どう表現したらよいでしょう。これから様々な作品を取り上げていきますが、率直なところ、ワクワクする気持ちとプレッシャーとが半々です。

読響と私とで織りなす音楽が、東京のみならず、日本の音楽界、世界の音楽界を盛り上げていくことに少しでも繋がれば、と思っています。

1月の三つのプログラムは、読響との新しい一步を踏み出すべく、それぞれに大きな特徴を持つように選曲させていただきました。ご堪能いただけたら幸いです。

会場で皆さんにお会いできることを、楽しみにしています！

山田和樹

心に残るクラシック

竹森俊平——①

Shunpei Takemori

至福の5時間半

メシアン：歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉



音楽は趣味に過ぎないが、内容の高度なプログラムを精神集中して聴くようであれば「趣味」にならないと考えている。読響で〈アッシジの聖フランチェスコ〉をやると知った時は狂喜した。人気のない現代音楽で5時間を超える演奏会。だが東京の2回の公演はすぐに完売した。世界でも稀にしか聴けない記念碑的作品の公演、完売で当然だ。取り上げたカンブルランも、読響も立派。無難なプログラムに安住してはいけないというメッセージが日本の音楽界に伝わったはずだ。それにしても多くの聴衆がこの大曲を最後まで聴き、感動した。なぜだろう。それをずっと考えていた。もちろん演奏が素晴らしかったのが最大の理由。「音楽は複雑でも台本はシンプル」なことも理由の一つだと思う。

いつの世にも時流があり、文学も、音楽も呼応して発展する。だから、音楽が複雑になると台本も難解になるの

が普通だ。メシアンの愛弟子で、作曲も指揮もしたブーレーズは詩に音楽を当てるとき、音楽と同様な新しさを詩にも求めた。そのため彼の曲は時に難解だった。実は筆者はブーレーズが大好きで、生前、演奏会だけでなくリハーサルにも頻繁に赴いた。彼が最後に振ったのは、2012年のルツェルンでのリハーサル。本番は過労で降りたのだが、そのリハーサルを聴いた。一般客は入場禁止だったが、荷物の搬入に紛れて会場内に入った。

当時メシアンにはむしろ違和感があった。今回、本当に見直した。メシアンの台本がシンプルなのはなぜか？謎を解く鍵が二つある。

一つ目は「至福」。開幕早々、フランチェスコの歌に「ラ・ジョワ（歓び）」という言葉が出た途端音楽が一変し、玄妙で、官能的で、美しき調べとなる。ハーモニーを勉強し尽くしたメシアンは、ここに持てるものすべてを注ぎこ

む。カトリックの作曲家は聴衆と至福を共有できるような音楽を書く。ブルックナーもそうだった。

二つ目は「鳥の声」。音楽教育を受けた人に五線譜を渡すと、まず鉛筆で小節のバーを引き、調性、リズム記号を書き込む。さあ、それで鳥の

声を書き写せといったらパニックになる。「何と複雑な！」とぼやくだろう。鳥は生命の必要から鳴いている。その音楽ほど自然なものはない。五線譜でしか音楽を捉えられない思考法が不自然なのだ。メシアンは鳥の声の大家で、この曲には彼が世界を旅し収録した鳥の声が詰め込まれている。音楽の可能性を鳥の声に求めるメシアンの旅は、「自然さ」を求める旅でもあった。

これはメシアンの最初で最後のオペラで、台本作者も彼だ。自然を愛し、鳥に説教したというカトリックの改革者フランチェスコを描いた作品を、彼が書かずに死ぬるわけがない。どの場面も徹底して考え抜いたはずだ。だから迫真性がある。登場人物の性格、心理を、それぞれの役に配した鳥の声に語らせるという、斬新な手法が情景に瑞々しさを与える。第2幕の「鳥への説教」の場面では、アッシジ周辺のウンブリア地方に棲息するはずのない鳥の声をフランチェスコは聞く。メシア



カンブルラン指揮、読響の〈アッシジ〉（2017年11月26日、サントリーホール） ©読響

ンが探索した熱帯の鳥類で、フランチェスコは夢の中でその声を聞くのだ。「永遠」に住む神の世界に時間軸はない。中世のフランチェスコを思い描くメシアンに呼応し、フランチェスコは800年先の世界に住むメシアンの幻影を見るのか。時空を超えた交流の壮大な夢を、作曲者の特権が可能にする。

「救われるか否かは神が出生前に決めており信仰と無関係」という教説（運命予定説）を、第2幕の登場場面で、天使が修道僧に問いかける場面が、オペラで唯一難解だろうか。一番目の僧は「忙しいのにバカなことを聞くな」と怒る。二番目の僧は実に含蓄のある答えをする。大自然で交わされる、心洗われる清談だ。それにしてもこの天使は魅力的だな。

profile たけもり・しゅんぺい

1956年東京都生まれ。経済学者。慶應義塾大学、米ロチェスター大学を経て、97年より慶應義塾大学経済学部教授。専門は国際経済学。主な著書に『経済論戦は甦る』（読売・吉野作造賞）、『世界デフレは三度来る』『欧州統合、ギリシャに死す』など。

小森谷が読響メンバーと繰り広げる白熱のアンサンブル

2/5 (火) 19:30 第21回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演 **完売**

《小森谷巧リーダーによる室内楽》

モーツァルト：オーボエ四重奏曲 シューベルト：八重奏曲

ヴァイオリン：小森谷 巧、太田博子 ヴィオラ：柳瀬省太

チェロ：遠藤真理 コントラバス：大槻 健 オーボエ：辻 功

クラリネット：金子 平 ファゴット：岩佐雅美 ホルン：日橋辰朗



小森谷巧

小林が〈運命〉を振り、英国の新鋭ワリー＝コーエンが共演

2/9 (土) 14:00 第214回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/10 (日) 14:00 第214回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈オベロン〉序曲

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

ヴァイオリン：タムシン・ワリー＝コーエン



小林研一郎



タムシン・ワリー＝コーエン

二人のカリスマが競演！ 炎のマエストロ×天才ピアニスト

2/14 (木) 19:00 第619回 名曲シリーズ
サントリーホール

2/16 (土) 14:00 第109回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番 ブラームス：交響曲 第2番

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者） ピアノ：牛田智大



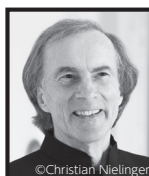
牛田智大

ドイツの巨匠が1公演のために来日。ブルックナーの神髄に迫る

2/22 (金) 19:00 第585回 定期演奏会
サントリーホール

リーム：Ins Offene...（第2稿／日本初演）ブルックナー：交響曲 第7番

指揮：ローター・ツァグロゼク



ローター・ツァグロゼク

2 月 公演の聴きどころ

2月は読響特別客演指揮者の小林研一郎、ドイツの重鎮ツァグロゼクと、巨匠二人が登場する。

9日、10日の《マチネー》では、小林研一郎がベートーヴェンの名曲〈運命〉で渾身のタクトを振り、聴衆を熱狂へと誘う。繊細かつ情熱的にメロディを歌い、闘争から勝利へと至る〈運命〉のドラマを感じさせてくれるだろう。前半は、ロンドン生まれの新星ヴァイオリニスト、ワリー＝コーエンがチャイコフスキーの協奏曲で協演。艶やかな音色を奏でる。

14日《名曲》、16日《みなとみらいホリデー名曲》は、“炎のマエストロ”小林研一郎と、若き天才ピアニスト牛田智大が夢の共演。牛田は、日本人ピアニストとして史上最年少の12歳でCDデビューを果たし、テレビでも話題の若手ピアニストの筆頭株。チャイコフスキーのピアノ協奏曲では、ロマンティックなメロディと超絶技巧が聴きどころだ。知的な解釈と瑞々しい感性で情熱的に奏でられる演奏に期待が高まる。牧歌的な雰囲気を持つブラームスの交響曲第2番では、叙情に満ちた懐かしいメロディを美しく歌い上げ、歓喜のフィナーレを高らかに響かせる。

22日《定期》は、ドイツの巨匠ツァグロゼクが2016年3月以来、約3年振りに登場。ツァグロゼクは、これまでにライブツィヒ歌劇場やシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督、ベルリン・コンツェルトハウス管の首席指揮者などを歴任。古典派から近現代作品まで幅広いレパートリーを誇り、デッカ・レーベルの「退廃音楽シリーズ」やベルリン・コンツェルトハウス管とのブルックナーなど録音でも評価が高い。今回も得意のブルックナー第7番で作品の神髄に迫る。宇宙をも包み込むような壮大で美しい響きに酔いしれたい。

（文責：事務局）

1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
読響アンサンブル	¥4,000			

“色彩の魔術師”カンブルランの極上のフランス音楽

3/7 (木) 19:00 第620回 名曲シリーズ
サントリーホール

3/9 (土) 14:00 第110回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

イベール：寄港地、フルート協奏曲

ドビュッシー（ツェンダー編）：前奏曲集、ドビュッシー：交響詩〈海〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

フルート：サラ・ルヴィオン



サラ・ルヴィオン

豪華歌手陣の共演で贈るシェーンベルクの巨大作

3/14 (木) 19:00 第586回 定期演奏会
サントリーホール

完売

シェーンベルク：グレの歌

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ソプラノ：レイチェル・ニコルズ

メゾ・ソプラノ：クラウディア・マーンケ

テノール：ロバート・ディーン・スミス、ユルゲン・ザッヒャー

バリトン・語り：ディートリヒ・ヘンシェル

合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮：三澤 洋史）

※当初発表したものから出演者が一部変更されました。



レイチェル・ニコルズ

鮮烈なサウンド！ 小編成で披露する20世紀音楽選

3/19 (火) 19:00 読響アンサンブル・シリーズ 特別演奏会
紀尾井ホール

《カンブルラン指揮〈果てなき音楽の旅〉》

ヴァレーズ：オクタンドル メシアン：7つの俳諧

シェルシ：4つの小品 グリゼー：〈音響空間〉から“パルシエル”

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ピアノ：ピエール＝ロラン・エマール



ピエール＝ロラン・エマール

任期ラスト公演。カンブルラン、9年間ありがとう！

3/23 (土) 14:00 第215回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/24 (日) 14:00 第215回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ベルリオーズ：歌劇〈ベアトリスとベネディクト〉序曲

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ベルリオーズ：幻想交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ピアノ：ピエール＝ロラン・エマール



シルヴァン・カンブルラン

新鋭・鈴木優人による〈ペトルーシュカ〉でシーズン開幕！

4/4 (木) 19:00 第621回 名曲シリーズ
サントリーホール

ラモー：歌劇〈優雅なインドの国々〉組曲

ショパン：ピアノ協奏曲 第2番

ストラヴィンスキー：バレエ音楽〈ペトルーシュカ〉（1947年版）

指揮：鈴木優人

ピアノ：レミ・ジュニエ



鈴木優人



レミ・ジュニエ

エストニアの鬼才が指揮し、ノルウェーの名花フランクが共演

4/17 (水) 19:00 第587回 定期演奏会
サントリーホール

トゥール：共同委嘱作品（アジア初演）

ストラヴィンスキー：ヴァイオリン協奏曲

武満 徹：星・島（スター・アイル）

シベリウス：交響曲 第5番

指揮：オラリー・エルツ

ヴァイオリン：ヴィルデ・フランク



オラリー・エルツ



ヴィルデ・フランク

華麗なサウンドで魅了！ マイスターが振る〈展覧会の絵〉

4/27 (土) 14:00 第216回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/28 (日) 14:00 第216回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

プロコフィエフ：交響曲 第1番〈古典〉

カサド：チェロ協奏曲

ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）

チェロ：上野通明



コルネリウス・マイスター



上野通明

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
（10:00～18:00／年中無休）
ホームページ・アドレス <https://yomikyo.or.jp/>

週末の午後は東京芸術劇場でゆったりと過ごす《土曜・日曜マチネーシリーズ》と、フェスティバルホールを舞台とした《大阪定期演奏会》。新常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレを中心に今季も充実した指揮者陣と多彩な顔ぶれのソリストが登場する。傑作ぞろいのプログラムでオーケストラを聴く醍醐味を味わいたい。

〈飯尾洋一（いひよういち）・音楽ライター〉

土曜・日曜 マチネーシリーズ



コルネリウス・マイスター
©Marco Borggreve

幕開けとなる4月は首席客演指揮者コルネリウス・マイスターが登場し、組曲《展覧会の絵》を指揮する。ムソルグスキーの原曲にラヴェルが鮮やかなオーケストレーションを施した露仏作曲家の二人三脚による名曲だが、マイスターが描くのは、ロシアの土の香りか、それともパリの華やかな賑わいか。名チェリストとして知られたカサド作曲のチェロ協奏曲に挑むのは、幼少期をスペインで過ごした上野通明。



上野通明



セバスティアン・ヴァイグレ
©Marco Borggreve

5月はセバスティアン・ヴァイグレがブラームスの交響曲第4番をとりあげる。ロマン主義と古典主義が絶妙に調和するこの傑作で、ヴァイグレと読響コンビの目指す方向性が明確に示されることだろ

う。欧州と日本を拠点に活動する新鋭、岡田奏はモーツァルトのピアノ協奏曲第21番で独奏を務める。



岡田 奏
©Kazashito Nakamura

7月は特別客演指揮者である“炎のマエストロ”こと小林研一郎が、ドヴォルザークの交響曲第8番で燃えあがる。クラリネット界の貴公子アンドレアス・オッテンザマーは、ウェーバーのクラリネット協奏曲第1番で美音と名技を披露する。



小林研一郎
©読響



アンドレアス・オッテンザマー
©Katja Ruge Decca

8月は名誉客演指揮者の尾高忠明が指揮台に上る。チャイコフスキーの交響曲第6番《悲愴》は、真夏の蒸し暑さを悲しみのカタルシスで吹き飛ばしてくれるはず。メンデルスゾーンのヴ



尾高忠明
©Martin Richardson



アナ・マリア・ヴァルデラマ
©Marco Borggreve

ァイオリン協奏曲で独奏するアナ・マリア・ヴァルデラマは輝かしいコンクール歴を誇るスペインの新星だ。

9月はふたたびヴァイグレが登場し、マーラーの交響曲第5番を振る。読響の機能性を最大限に生かしたスペクタクルを堪能したい。ウィーンの重鎮ルドルフ・ブッフビンダーは、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番でベテランの至芸を聴かせる。



ユーリ・テミルカーノフ
©読響

10月は巨匠ユーリ・テミルカーノフによるブラームス・プロ。プログラムは、アルメニア生まれの名手セルゲイ・ハチャトゥリアンの独奏によるヴァイオリン協奏曲と交響曲第2番。強靱なブラームスを期待できそうだ。



セルゲイ・ハチャトゥリアン
©Marco Borggreve



トマーシュ・ネトピル
©Marco Borggreve

11月はチェコ出身のトマーシュ・ネトピルによる一ひねりした「プラハ・プログラム」。プラハで初演されたモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の序曲と交響曲第38番《プラハ》、やはりプラハで初演されたヤナーチェクの《シンフォニエッタ》が並ぶ。《シンフォニエッタ》は村上春樹の小説

『1Q84』で脚光を浴びた作品でもある。フランスのアレクサンドル・タローはプーランクの機知に富んだピアノ協奏曲を演奏する。

12月はなんといってもベートーヴェン《第九》だ。指揮は古楽の分野で実績豊富なアイヴァー・ボルトン。サリー・マッシュズ、池田香織、小堀勇介、トーマス・オリーマンスの独唱陣と新国立劇場合唱団による最高水準の“歓喜の歌”を体験したい。

2020年2月はもう一人の首席客演指揮者、山田和樹がマーラーの交響曲第1番《巨人》を指揮する。当初この曲のために構想され、後に破棄された《花の章》も聴けるのは貴重。新時代のスター、ネマニャ・ラドウロヴィチはハチャトゥリアンのヴァイオリン協奏曲でアグレッシブなソロを聴かせる。



山田和樹
©読響



ネマニャ・ラドウロヴィチ
©Caroline Doutre

3月の締めくくりはヴァイグレ。次代の巨匠ルーカス・ゲニューシャスとのベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番《皇帝》、R.シュトラウスの交響詩《英雄の生涯》という雄渾な楽想を持つ2作品でシーズンの掉尾を飾る。



ルーカス・ゲニューシャス
©Mikhail Krutman



大 阪 定 期 演 奏 会



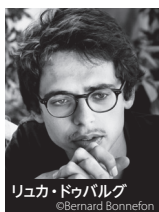
新シーズンも例年と同様に3回の大阪定期演奏会がフェスティバルホールで開かれる。



ブラムウェル・トーヴェイ
©TylerBoye

まず7月にイギリスの指揮者、ブラムウェル・トーヴェイが登場する。長年バンクーバー交響楽団の音楽監督

を務めたベテランだが、近年、ライトセーバーを振って〈スター・ウォーズ〉の“帝国のマーチ”を指揮するYouTubeの映像が、大々的にインターネットで拡散されて話題を呼んだ。だから、というわけでもないだろうが、読響ではホルストの組曲〈惑星〉を振って、星々へのイメージーションを喚起する。ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番では



リュカ・ドゥバルグ
©Bernard Bonnefon

ウワサの鬼オリュカ・ドゥバルグがソロを務める。ドゥバルグは

2015年のチャイコフスキー国際ピアノ・コンクールで時の人となった逸材。結果は4位だったが、優勝者よりもはるかに大きな話題を呼んで、コンクール後にクレームルとの共演が実現したという異例のキャリアを持つ。

12月は年末恒例、ベートーヴェンの〈第九〉。ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団の名誉指揮者で、古楽の分

野でも実績豊富なアイヴァー・ボルトンが指揮台に立つ。声楽陣はサリー・マッシュズ、池田香織、小堀勇介、トーマス・オリーマンズ、新国立劇場合唱団。〈第九〉といえ、やはり第4楽章の“歓喜の歌”がハイライト。これを新国立劇場合唱団による最高水準の歌唱で聴けるのは心強いかり。

2020年2月は首席客演指揮者の山田和樹がマーラーの交響曲第1番〈巨人〉を披露する。この曲には当初第2楽章として構想されるも最終的に採用されな

かった〈花の章〉という楽章がある。これを第2楽章に復活させて演奏する指揮者もいるが、山田和樹は〈巨人〉に先立って、独立した一曲として演奏するのが興味深い。ハチャトゥリアンのヴァイオリン協奏曲の独奏者は新星ネマニャ・ラドウロヴィチ。ロックスターのような風貌でも話題を呼ぶが、実はセルビア出身の苦勞人。切れ味鋭いソロが客席を沸かせることだろう。



アイヴァー・ボルトン
©Nancy Horowitz



サリー・マッシュズ
©Sigtryggur Ari Johannsson



トーマス・オリーマンズ
©Marco Borggreve



山田和樹
©読響